【議事録（概要)】

1　会議名等：県立高等学校編成整備に関する懇話会
2　委 員 名：別紙（資料３）
2　日　　時：令和３年10月28日（木）10:00～11:30
3　場　　所：県庁13階第１会議室

進行	開会
島袋会長	会長挨拶
事務局	配布資料の説明
島袋会長	議事進行
事務局	議題：県立高等学校編成整備計画（素案）について説明。
金丸委員	P.26泊高校の改編について。 全日制があるのはいいと思いつつも、高校入試を迎える中学３年生が、泊高校の全日制を選ぶ理由があまり思いつかない。不登校を経験した生徒や、働きながら学びたい生徒にとっては、定時制や通信制は意義があるが、全日制を設置することで、どんな生徒が入学することを想定しているのか。志願倍率が上がるのかについても疑問がある。
事務局	学習につまずいた生徒や人と接するのが苦手な生徒が定時制で勉強しつつ、全日制の授業も受けられるようになれば、幅広い学びが可能になると考える。全日制と言っても単位制なので、４コマは全日制の授業を取って、残りは通信制を利用するなど、幅広い学び方が可能になる。
金丸委員	他の単位制の高校と違う特色があればよいと思う。中学校で進学相談を行う際に、泊高校はこうです、他の単位制高校はこうです、と明確な説明ができて、しっかり話ができるのであればよい。
事務局	どんな生徒がこういう学校を必要としているのか、中学校側と情報共有を図りたい。真和志高校も単位制だが、学年制に近い形をとっている。泊高校では、単位制の特色をもっと明確にしながら、生徒が希望するように時間割を組めるようにしたいと考えている。
金丸委員	生徒に説明するために中学校側も理解する必要があるので、今後もぜひ情報共有して取り組んでもらいたい。
冨里委員	単位制の全日制は真和志高校もある。那覇市に同じような学校が２つあることになるが、生徒のニーズはあるのか。定時制、通信制で勤労学生が減少していることは承知しているが、ヤングケアラーの問題やコロナ禍の影響で、経済的に厳しいという家庭も多く、働きながら学校に行きたいという生徒は少なからずいると思う。那覇商業の定時制を泊高校に統合し、全日制、定時制、通信制の３課程でフレキシブルに学べるのはいいと思うが、実際にスタートしても生徒が来ないという状況になると困る。コロナ禍の影響もあって、今後定時制のニーズがどうなるのかわからない部分もあるので、泊高校については、学校側や中学校の意見も聞きながら、慎重に進めてほしい。
事務局	泊高校の全日制については、一般的な全日制と違う形を想定している。例えば真和志高校は、単位制でありながらも、どちらかというと学年制に近い形をとっている。泊高校ではもっと柔軟性のある、弾力的な対応ができる単位制を想定している。働きながら通学したい生徒でも、毎日同じ時間に働くわけではないかもしれないし、毎日昼

間の勤務というわけではないかもしれないなど、曜日によって働く時間が変わるかもしれない。例えば、全日制に在籍し、月水金は１、２校時の授業を受けて、昼間はアルバイトに行って、また夕方や夜間に学校に戻ってくる。火木は１～６校時の授業を受けるなど、様々なバリエーションに柔軟に対応するための単位制全日制課程を考えている。従って、一般的な高等学校の学校生活では想定しにくいが、生徒によっては中抜けの時間がある可能性もある。それが必要な生徒がいるのであれば、それに対応する必要があるのではないかと考えている。

山城委員　中学校では、いろいろと課題のある生徒たちに対しても、先生方が３年間一生懸命関わって、何とか卒業までこぎつけているが、沖縄県の中卒無業者の問題も大きく、中学校の先生方にとっては、一生懸命関わって卒業した子どもたちの、次の関わり先がどこになるのかということが、大きな課題である。改編によって、泊高校がそういう生徒たちの居場所にもなれるような学校になるのであれば、ありがたいと思うので、今後中身を更に検討していく際には、中学校の現場の先生方の声や生徒のニーズなども、十分に聞いてほしい。

事務局　県教委としても、今後中学校側との連携が更に重要になると考えている。教育ニーズの多様化が進んでいることは認識しており、きめ細かい対応をしていくためには、これまで以上に連携が必要だと考えている。

城間委員　義務教育の方では通級による指導が進んでいるが、その後の行き場がまだまだであると感じる。学びに困難性を持っている子どもたちにとっては、その後の行き場が重要であり、その点では通級による指導が活用できるのではないかと考えている。教員の人材育成も含めて、今後通級による指導の充実を検討する必要があると思う。インクルーシブ教育システムの構築にも関わってくるところなので、充実できるとよいと思う。

事務局　資料６にも少し書いているが、通級による指導については、担当課で今後計画的に進める予定である。次年度以降導入する学校が決まっているというふうにも聞いており、今後も学校や地域の実情を踏まえながら、計画的に取り組んでいく。

城間委員　それらの学校で培った通級による指導のノウハウを、他の高校と情報共有できるようなシステムを構築してほしい。中学校との連携もそうだが、インクルーシブ教育システムを構築するためには、例えば教材や学ばせ方、学習評価などについて、高校同士も繋がって情報共有することが必要になる。泊高校だけで終わるのではなく、他の学校とも情報共有できるようにしてもらいたい。

島袋会長　P.26 の内容は、全日制課程、定時制課程、通信制課程があり、相互乗り入れで弾力的に教育を行うもの、という理解でよいか。

事務局　そのとおり。単位数については、自分が在籍する課程以外の課程での修得には上限があるが、その範囲内で柔軟に対応できるようにしたいと考えている。泊高校は定時制と通信制がある県内唯一の特色ある高校であり、それを更に幅広いものにできれば生徒にとっていいものになるのではないかと考えている。

島袋会長　カリキュラムの作成や授業展開をかなりきめ細かく整理する必要があり、大変だと思うが。

事務局　県外に同様の事例があり、訪問して参考にしたいが、コロナ禍でなかなか難しい状況であった。先ほどの真和志高校や、総合学科を有する嘉手納高校、陽明高校なども、様々な授業を提供しているので、県外事例と併せて参考にしながら、作っていきたいと考えている。

宮里委員　不登校を経験した生徒などが、同じ境遇の生徒たちと共に学んで自立心などを育むことは重要だと思うが、多様なニーズに対応することで逆にバラバラになると、お互

いに共有する時間が少なくなってしまう可能性がある。泊高校の改編によって選択肢が増えることはいいと思うが、その点は大丈夫か。

事務局　現在でも泊高校は、ＨＲ活動を中心に学校行事等をとおして生徒同士の結びつきを強めていく方針で取り組んでいる。全日制課程ができることによってそこが壊れることがないように、学校側と十分話し合いながら進めていきたいと考えている。

山城委員　P.28 キャリアアップコースの設置について。
嘉手納高校と石川高校をモデル校として、生徒募集を別に行うということか。それとも入学した後に必要な生徒を集めるということか。

事務局　まだモデル校の段階であり、２校それぞれ異なる方法で取り組む予定だと聞いている。嘉手納高校では募集を別にし、石川高校では募集を分けずに行う。石川高校はすでに習熟度別授業に力を入れており、今までの取組を拡充させるような形で進める。同じキャリアアップコースだが、あくまでもモデル校ということで、それぞれ異なる入口から始める予定である。２校の取組を踏まえて、令和５年度以降はどういう形がいいのか検討していくことになる。

山城委員　つまり石川高校では、普通科に入学した生徒の中で、必要な生徒や希望する生徒を別のクラスにするという考え方でよいか。

事務局　習熟度別を充実させるような考え方になると思う。

山城委員　学級編成は他の生徒と同じように行い、授業によって習熟度に応じで分けるということか。

事務局　そのようになると思われる。

山城委員　嘉手納高校は別枠で募集をかけるという方向で進めているということでよいか。

事務局　そのとおり。いずれにしても、学び直しの教育課程等について研究を進め、それ以降の年度に繋げていきたいと考えているところである。

山城委員　普通高校でも定員割れの学校があり、そのような学校で不合格者が出ているかどうかは把握していないが、入学希望者を全員入学させて、学力が不十分な生徒に対し、必要に応じてこういう取組を行うというのが、将来的には理想的だと思うが、いかがか。

事務局　合格者については学校長が判断することになっている。石川高校は全員入学の年もあると聞いているが、年度によって異なる可能性も十分ある。

山城委員　広く子どもたちを救っていくという視点で、このような取組が他の高校においても可能になればいいと思う。

事務局　それらも含めてモデル校としてノウハウを積み重ね、どういう方法がいいのか検討していきたい。

金丸委員　石川高校の方法は理解できるが、嘉手納高校のように別枠で募集する場合は、中学校側からすると、出願資格等の説明がしにくいと感じる。高校では、各校の教育課程に適応できる資質がある生徒を入学させることが、入学者選抜の基本だと思うが、世の中では全員入学の意見もあり、折り合いをつけた形がこれではないかとも思う。嘉手納高校の募集の仕方など、我々が生徒に説明する際の情報についても提供してもらいたい。

島袋会長　P.28 の文言について。
４行目に「社会的・職業的自立を目指し学習意欲のある生徒に対し」とあるが、学びに様々な困難性を抱える場合、学習意欲は高くはない。学習意欲が高ければ学校側は

	あまり困らないと思うが、そうじゃないから困っていると思う。例えば「更に学習意欲を高めるべく」のような書きぶりにした方がよい。そのために「義務教育段階の学習内容の確実な定着を図る」という考え方にしないと、論理的に矛盾が生じるのではないかと思う。
事務局	その方向で検討する。
城間委員	今のところ石川高校と嘉手納高校がモデル校となっているが、両校の成果と課題を踏まえ、今後設置校を増やしていくことも想定している、という理解でよいか。
事務局	そのとおり。P.28 の工程にあるとおり、ノウハウを積んだうえで、他地区についても設置の要否を検討することとしている。
金丸委員	P.24 新たな連携型中高一貫教育について。 現在本部と久米島で連携型中高一貫教育に取り組んでいるが、高校入試がないことで中学生が勉強しないという話を耳にする。そういう課題もある中で新たに取り組むことのメリットと、課題解決の手立てについて聞きたい。
事務局	「進学に特化した連携型」と書いているが、別の言い方であれば「勉強させるための連携型」と捉えてよいと思う。更に学びたい、高みを目指したいという希望を持つ生徒が、その希望を叶えられるような連携型にしたいと考えている。併せて入試の在り方についても検討する必要があると考えている。
伊禮委員	これは今後既存の高校において、連携型を増やしていくということか。
事務局	本部と久米島に加えて、他の地区や学校で導入できないかを研究していきたいと考えている。
島袋会長	P.23 併設型中高一貫教育校への新たな学科等の新設について。 新たな学科等の設置は、名護高校には当てはまらないということでよいか。
事務局	名護高校においては、併設中学校の生徒は基本的にフロンティア科に入学することとしている。フロンティア科は現在２学級あり、１学級で開校する併設中学校が将来的に２学級になった場合は、必然的に全員フロンティア科に入学することになる。
島袋会長	当面は、２学級のうち１学級は併設中学校の生徒が入学し、あと１学級は他の中学校の生徒が入学するということでよいか。
事務局	そのとおり。
山城委員	本来中高一貫教育は、中学校に入学した生徒がそのまま高校に上がって、中高連続して一貫した教育を行うというイメージだが、P.23 の内容はそうではなく、併設高等学校に新たな学科等を作って併設中学校の生徒が入学するが、これまでどおり他の中学校からも既存の学科に入学してくる、ということか。将来的に中等教育学校のような形にすることも想定しているのか。
事務局	P.24 の９行目でも触れているが、新たな学科等の設置後、他の中学校からの生徒と分けて６年間の一体的な教育課程を進めることで、どのような効果が得られるのかを検証したうえで、将来的には中等教育学校、あるいはそれに近いような形を検討したいと考えている。
冨里委員	山城委員がおっしゃったように、中等教育学校のような形がベストだとは思うが、中学校に入れなかった生徒は高校から入学することもできなくなるため、生徒や保護者の落胆は大きいと思われる。球陽高校では、併設中学校からの生徒と他の中学校からの生徒が共に学び、お互いに刺激し合う中で、後者が前者に追い付け追い越せと発奮するなど、良い化学反応が起こることもあった。後から入ってきた生徒の中には併

設中学校の生徒を超えていく生徒もいた。このように、高校から入ってくる生徒にも優秀な生徒はおり、さらに県立高校でもあることを踏まえ、中等教育学校への移行は時間をかけて慎重に検討してほしい。

事務局　おっしゃるとおり、まさにそういったことを考慮したうえで、段階的に、まずは新たな学科等を設置したいと考えているところである。

冨里委員　あとは、できるだけ早く名護高校附属桜中学校の学級増を検討してほしい。40 名だと人間関係が厳しく、何かあると逃げ場がない状態である。２学級あればクラス替えができるので、できれば早めに 80 名をお願いしたい。

事務局　まずはどのくらいのニーズがあるかを見極めたい。また、中等教育学校あるいはそれに近い形に移行するとなると、中学校の募集定員を高校の生徒数に合わせる必要があるため、それだけの人数を中学校段階から集められるかについても、慎重に検討する必要があると考えている。進学実績等によっても生徒の集まり具合が変わってくると思うので、そのあたりはじっくりと見極めたいと思う。

冨里委員　県立中学校の募集定員が増えると、市町村立中学校は優秀な生徒を多く取られることになり、大変だと思う。県立なので、地域の状況も見ながら進めてほしい。

事務局　選択肢が広い方がいいのか狭い方がいいのか、生徒の気持ち、保護者の気持ちなど、いろいろな要素がある。多様な生徒たちに対してどの程度多様な選択肢をどの程度提供できるか、皆様の意見をいただきながら、多様なニーズに応えられるものにしていきたい。

伊禮委員　P.23 のイメージ図だと、併設中学校からの生徒と他の中学校からの生徒が完全に分かれているが、前者の中にも怠けてしまう生徒がいるかもしれないし、後者の中にも頑張って学力が上がる生徒もいるかもしれない。そういう場合、学科間の生徒の入れ替えということも、将来的には考えられるのか。

事務局　それが絶対にダメだということにはならないと考えている。最終的には学校長の判断にはなるが、学力が高いかどうかでの判断もあるかもしれないし、進度の速さについていけるかどうかもあるかもしれない。そういったことも総合的に見ながら、教育的配慮ということで学校長が判断することになる。

城間委員　P.22 北部地区への併設型中高一貫教育校設置について。
どれくらいの生徒が名護高校附属桜中学校への入学を希望しているか把握しているか。

事務局　北部地区については、関係する市町村教育委員会との意見交換や、有識者等で構成される懇話会を開催し、ニーズがあることは把握しているが、１学年あたりの児童生徒数が、那覇南部は約８千人、中部が約６千人であるのに対し、北部は約１千２百人である。それを考慮して１学年１学級からスタートし、状況を見ながら学級増を検討したいと考えている。

城間委員　保護者の立場からすると、私立学校は経済的な負担が大きく、県立の中高一貫教育校に進学するにしても、中南部にしかないため、北部からの通学もまた負担になることから、おそらくニーズはあるだろうと思っている。

事務局　おっしゃるとおり、経済的負担も大きいので、できるだけ早めに作ってほしいという要望があった。名護市だけではなく他の町村からもそのような要望があり、ニーズがあるとは認識しているが、志願倍率がどのくらいになるかはわからない。

城間委員　私立の中学校に入ったものの、経済的な事情から途中で地元に戻らざるを得なくなった生徒を何人か見てきたので、そういう点でも、地域にあるというのは大きいと思う。

事務局	いわゆる４Ｋと呼ばれる県立の進学校にも生徒が流れているので、そういう生徒を地域で育てたいという思いがある。
城間委員	人材育成となると、外に流れてしまうことも多い。県外の難関校に進学した生徒の中で、沖縄に戻ってきて沖縄に貢献できる人材がどれくらい育っているかを考えると、やはり地元で、という部分は大きいと思う。
島袋会長	名護高校周辺の高校から意見は出なかったか。
事務局	北部地区の高校は定員割れが厳しい状況の中で、名護高校の定員を増やすと他校に影響が出るというような話はあったが、北部の進学校である名護高校に中学校を併設するということについては、それほど影響はないとの意見が多かった。
島袋会長	もともと北部は中学校の学力の高い生徒が中南部に流れてしまい、なかなか地元の高校に優秀な生徒が入ってこないという話を聞いている。
事務局	北部地区では名護高校が唯一の進学校であり、三中の流れを汲む伝統校である。まずはそこの充実を図ったうえで、地域の子どもたちを地域で育てる環境を作りたいと考えている。また、学力が高い生徒の中にも、部活動を充実させたいということで、フロンティア科ではなく普通科を選ぶ生徒もいると聞いている。我々としては、選択肢の一つとして、中高一貫教育を提示できればと考えている。ちなみにフロンティア科でも十分部活動に取り組むことはできる。前のラグビー部のキャプテンはフロンティア科の生徒であり、部活動を頑張っている生徒も相当数いると聞いている。
島袋会長	いわゆる「勉強オンリー」ではないということか。
事務局	そのとおり。
冨里委員	P.11 高等学校規模の適正化について。 県としては４～８学級を適正規模に設定しているが、現在それを超過している学校が、１学年９学級が７校、10 学級が２校となっている。そういう学校を今後適正規模化する予定はあるか。コロナ禍の影響もあるかもしれないが、近年広域通信制を選択する生徒が増加し、もし県立高校で全員合格にしても、定員は埋まらないところまで来ていると思う。また、全体的に普通科志向が強く専門高校が空いている状況だが、普通科の生徒の中にも、ものづくりの方が向いていると思われる生徒も多い。過大規模校を適正規模化することで、専門高校に目を向ける生徒も出てくると思う。
事務局	P.12 において、１学年９学級以上の高等学校については、地区内の生徒数や入試の状況、学校運営の影響等を考慮し、学校の適正規模化を検討していく必要があると、少し柔軟な書きぶりで記載しており、これを受けて、コロナ禍の影響等も見極めながら、今後検討していきたいと考えている。
冨里委員	高校入試や学区制のことも関係するので、そう簡単ではないと思うが、ぜひお願いしたい。
島袋会長	先ほど中学校卒業後の無業者について少し話題に上がったが、教育庁では中学生の卒業後の進路の動向は把握しているのか。
事務局	担当課で調査している。
島袋会長	中学校卒業で就職と言ってもなかなか難しい状況だと思う。P.4 の図４を見ると、県立高校の入学定員と入学者数の間に千人以上の開きがあるが、中学校卒業後の無業者は結構いるのか。
事務局	手元に資料がないので、後ほど調べてお伝えしたい。

島袋会長	その他ご意見等ないようなので、そろそろ終了としたい。 今後意見等あれば、メールでも構わないので事務局へお寄せいただきたい。 本日の意見等については、事務局で取りまとめ、次期計画（素案）への追加・修正を検討してもらいたい。 これで本日の日程は全て終了とする。 閉会